

その他（資料紹介）

全国栄養士養成施設協会研究会資料より

公衆栄養学実習の適切な教授法について

栄養学部 大畑 仁美

この夏、公衆栄養学分野に対する研修があり参加の機会を得たので、その内容を通して自分自身の方針を検証し、また分野を超えて役に立つ情報となることを願い、この紙面を借りて報告する。

栄養学部は文部科学省の他に、卒業＝国家試験受験資格取得という厚生労働省の指導下があり、管理栄養士や臨床検査技師になるために必要な科目を4年間通じて順を追った教育計画を実行し、仕上げとして4年次には事業所・病院・行政での臨地実習に出かけることになる。就職活動で社会人としての自分について考えると共に、この臨地実習では現場の管理栄養士の仕事ぶりや関わるであろう他の職種の人たちに出会うのである。行く実習先によって感想は様々であるのは言うまでもないが、自分がどの分野の管理栄養士としてまた臨床検査技師として活躍していきたいかをもう一度問い直すことになり、進路変更を試みる学生も少なくない。その進路の幅は、食品分野から医療・教育分野まで幅広い。また、近年は企業への食コンサルタントやメディアの媒体開発など、より幅広い分野で自分を生かせる可能性が出てきたのは有難いことである。しかし、それに伴ってカリキュラムのボリュームも増し、学生たちは授業とレポートで多忙な毎日を過ごしている。

以下は本学栄養学部のディプロマポリシーである。

知識・理解

- ① 健康科学に基づいた疾病予防および健康増進に必要な基礎・専門分野の学問知識を習得している。
- ② 人間性・科学性及び国際性を身につけ、管理栄養士・臨床検査技師として社会の発展と福祉に寄与する基礎的能力を持っている。

思考・判断

- ① 科学的根拠に基づいて食の安全性を思考し、検証できる。
- ② 健康科学の学問領域において的確な考察及び判断ができる。

関心・意欲

- ① 予防医学の知識を使って、患者および地域住民の栄養管理・栄養改善に寄与できる。
- ② 我が国の高齢社会に深い関心を持ち、生活習慣病など病気の予防に強い意欲を持っている。

態度

- ① 医療関係、食品製造関係、食育関係などの分野で活躍することを強く希望している。
- ② 地域医療とチーム医療の担い手として自覚を持ち、責任を十分に果たすことができる。

技能・表現

- ① 人と十分なコミュニケーションをすることができ、適切な栄養指導、栄養管理、栄養療法を実践できる。
- ② 医療従事者としてのモラル、最新の知識・技術をもって信頼できる医療情報を提供できる。
- ③ 栄養学・臨床検査学のリーダーとして社会の幅広いフィールドで活躍できる技能を習得している。

ディプロマポリシーの科学・医学・食品に対する“知識と理解”という部分では、他大学に誇れる実力を持っていることは、国家試験対策模試などの結果からも確かであると思っている。しかし、その他の目標には個人のパーソナリティーやアイデンティティーによる部分が大きく、直接教授するだけでは身につかない内的な要素が強く働くと感じている。私が担当する公衆栄養学分野はその代表的なもので、社会で生活する人を対象に成り立っている学問であり、疫学や質的な研究技法を用いる。栄養学の中ではまだ研究分野としての体系づけの歴史は浅く、科学的な基礎の知識を生かし、情報が溢れるこの社会の中で対象者にとって必要な指導ポイントを見つけ、実生活にあったアドバイスをする。また、地域ぐるみで健康意識を高めていくという大きな目的は、繋がるどころ疾病の予防に貢献し、健康寿命を延ばすお手伝いをするという概念である。

最終目的は、基礎研究分野と同じく食を通して叶える“人生のQOLの向上”にまで及ぶ。

<資料より>

・学生にとってイメージが湧きにくい分野である。

「栄養学の構造とは、①食べものための学問、②メカニズムのための学問、③利用するための学問、この3つが揃って初めて栄養学が世の中で役立つ学問に成り得る」（佐々木敏氏）公衆栄養学は、この③を人に直接伝える部分を担う。そのためには、現実的に情報を収集・分析し、それらを総合的に評価・判定する能力を養うことが望まれる。

確かに、イメージが湧きにくいいため授業では事例や体験が不可欠となる。自分が困ってみないと問題に共感できない。自分以外の価値観が存在することを心から認めないと対象者に対する共感はできないという事を、私は授業を通して学生に伝えたいが、なかなかうまく伝えることはできていない。課題に対して、個人の育った環境や20数年の限られた体験の中から答えを見つけようとするのである。他の教科には、正しい数値があった。正し

い法則があった。でも公衆栄養学には答えがないし、漠然としている。と学生たちは感じるのである。他の教科の成績がとてよく、真面目に取り組む学生も、この“視点”を持てるまでは計画を立案する際応用の効いた地域対策に繋がらないようである。逆に、この視点に気づくと実践とつながる内容に興味湧き、この教科が得意になってくるようである。

<資料より>

・管理栄養士の業務

厚生労働大臣の免許を受けて、管理栄養士の名称を用いて、傷病者に対する療養のため必要な栄養の指導、個人の身体の状態、栄養状態等に応じた高度の専門的知識及び技術を要する健康の保持増進のための栄養の指導並びに特定多数人に対して継続的に食事を供給する施設における利用者の身体の状態、栄養状態、利用の状況等に応じた特別の配慮を必要とする給食管理およびこれらの施設に対する栄養改善上必要な指導等を行うことを業とする者

“高度の専門知識や技術を要する”という言葉は、置き換えれば「常によりよい情報や技術を身につける努力をする」ということになるのではないか。大学4年間で獲得してほしいのは、この管理栄養士という仕事を続けるためには一生涯学習を続けるという自覚ではないかと思う。また、保健、医療、福祉、介護分野の連携というチーム活動が重要な社会の中で、お互いに専門分野を担うという責任感ではないか考える。

公衆栄養学を担当する教員として自分の人間としての力量の少なさをひしひしと感じつつ、学生には“人間”と関わりながら生きていくための食べものや栄養の大切さを伝えることの奥深さや楽しさを感じてもらえることができるよう、授業や実習にはグループワークや疑似体験を加えている。今後もより体系立てた方針を確立していくつもりである。

研修の場でも教授法の秘策を教えていただいた訳ではなく、授業内容の事例を講義していただき、他大学の科目担当者と学生の指導に対する悩みを共有できたことは、自信を持って今後の方針を決める次への意欲となった。社会の変化とともに学生の価値観も変化してきている。学問だけではなく、社会人としてのルールから学ぶ必要性も感じる。そのためには、私自身教育技法を深める必要があり、専門知識以外の教育方法に関する研究会や研修から学んで行きたいと考えている。

本学の環境面に対する要望は、学生たちの“知識”以外の“意識”を目に見える形で表すのは難しいが、大学内での学部の垣根を越えた活動の充実が、公衆栄養学にも大きな力をもたらしてくれるだろうと考える。教育開発プログラムとして、是非導入を考えるべきなのは単位認定が伴う、他学部の学生との交流やボランティアを通じて社会を見る機会である。各自が自主的に行えばよいではないかと思われるかもしれないが、特に必要性を感じていない学生に対して、忙しい毎日の中でコミュニケーション能力を培い、将来への展望を持つために、夏休みや春休みの期間に充実した専門的要素がふくまれるプログラムが

あればと考える。

神戸学院大学を卒業する時に、受験資格とともに人としての自信ももって社会人のスタートを切ってほしいと思う。

教育内容の需要と供給がきつと大学の中に存在するはずである。“連携”が望まれる実践的な取り組みは大学全体として最初は手間と時間をかける必要があると思うが、各種の学科を有するこの大学のメリットを生かしていければと考える。